

鷗外「大塩平八郎」の世界

仲 秀 和

作品「大塩平八郎」は、前作「護持院原の敵討」につぐ、鷗外歴史小説第五作として、大正三年一月八中央公論に掲載された。そして同月八三田文学に、評論「大塩平八郎」が載せられ、後同年五月歴史小説集『天保物語』に作品が収められた際、付録として加えられたのである。二月十九日の史実、平八郎の年譜、そして暴動の原因や結果などに言及したそれは、後の「安井夫人」「高瀬舟」「寒山拾得」における付録や縁起と同様、作品自体のモチーフやテーマをそれとなく暗示している。人はしばしば鷗外自身の精神をたぐり、作品を闡明せんと試みるのであり、その時、付録や縁起は彼自身の肉声を一層伝えているがゆえに、それらを通じて主題を究明してゆかんとするのである。しかし、作品外において、その作品についての作家の意図が論述されてあったにせよ、自己完結性を持つはずの作品内に包含されることはあり得ない。かつ、それらを直接援用することが、作品の本質を過不足なくとらえられるとは限らない。文芸作品の秘密とは、作家のあずかり知らぬところに存在するものだからだ。それゆえに、十三章からなる、歴史小説「大塩平八郎」を、考察の対象とするものである。ただ、それと気づかれるように、「私が平八郎

の事を調べて見ようと思ひ立つたのは／＼で始まる付録は、過去の歴史と現在の作者が自由に交叉しつつ書き進められてゆく、後の史伝の方向性を、提示してはいるであろう。例えば、作品における平山助次郎は、自殺したと記されるだけであるが、付録において「人間らしく」と修飾されるところなど、作品としての歴史小説に鷗外の意図が十分書き込まれなかったのであり、それゆえ評論などを加えざるを得なかったのであろう。彼自身、「歴史小説」という様式に、もの足らなさを感じていたであろうと推測することも可能なのである。

二

作品はまず、西町奉行所に訴え出た少年二人の言動と奉行堀の動揺から、何事かの事件を暗示することに始まる。不気味な、そして鮮やかな幕あきであるといえよう。読者は、次第にその核心へと連れてゆかれるようである。くだくだしい、事の説明はなく、人物一人一人の行動を描くことを通して、鷗外は全貌を明らかにしてゆくのだ。そして第二章に入り、陰謀の首領の性格が描き出されるのだが、その名が明記されるのは、やっと章の末なのである。あたかも糸がたぐり寄せられるように、これから起こらんとする陰謀の中心人物へ、引きよせられてゆく。ここに、作者の周到な構成意図を読みとることが出来る。また、しばしば指摘される如く、奉行堀や跡部の狼狽を執拗に描くことにより、鷗外は、官僚の脆弱性を現実のそれと重ねあわせて批判している。この点に関しては、典拠である幸田成友著「大塩平八郎」（以下「幸田本」と略す）と作品の比較により、照明をあてられた小泉浩一郎氏の詳細な御研究があるのだが、作品上一層重要なのは、堀の手紙を読んだ跡部が、瀬田、小泉を捕えようと、「突然」決心するくだりである。鷗外は、「此決心には少し不思議な処がある」と書き出し、次の如く続ける。

堀の手紙によつて得た所は、今まで平山一人の訴で聞いてゐた事が更に吉見と云ふものの訴で繰り返されたと云ふに過ぎない。これには決心を促す動機としての価値は殆無い。／＼これは一昨日の夜平山の密訴を聞いた時にすべき決心を、今偶然の機縁に触れてしたやうなものである。

跡部のあわてふためくさまと、何をすべきか判然とせぬままに行動を起こしていることが推測せられる。鷗外はここで、「興津弥五右衛門の遺書」（以下「遺書」と略す）以来の、人間行為の不合理性をそのまま描かんとする方法を踏襲しているといえる。つまりは、行為の不透明性を凝視しているのだが、これを「遺書」執筆時にさかのぼつて考えてみよう。

鷗外が歴史小説を書き始めた動機を、彼の日記や作品から照射して論究するのは、鷗外論の定石になつてゐる。確かに、あの大正元年九月十三日の日記に、「予半信半疑す」と、自己の心境を書き留めた鷗外の内部は、その驚愕と感動において尋常ではないことが、容易に想像できる。「主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入り候批判がましき儀は無用なりと申候。」と「遺書」は書かれる。解釈、意味付け、批判の「無用」の世界、これを鷗外が乃木大将の殉死より受けた、感動それ自身であつたのである。以来、鷗外は作品内部において、解釈や批判などを一応さしひかえることになる。人間行為の原因や動機に、意味付けすることの空しさを知つたがためなのであろう。あるいは、本當の動機は、分析しようとするれば不可能になつてしまうものとして、彼には写つたのである。分析して抽出できるような透明な存在ではなく、出来たとしても、行為が完了された後で、考え出されてくるにすぎないのである。ゆえに、矛盾の中で、本當の動機がわからないままに何事かをなしてしまふ、不可思議な人間の現実を、彼は描いてゆくのである。作品に沿つて言うならば、第六章「坂本鉉之助」での、大西与五郎と善之進が平八郎をとどめんとして出来なかつた場面を、鷗外は次の如く表現する。

与五郎の養子善之進は父のために偵察しようとして／驚いて逃げ帰り、父と一しよに西の宮へ奔り、又懼れて大阪へ引き返しし
 なに、両刀を海に投げ込んだ。

幸田本には次の如くある。⁽²⁾

／親族に謀叛人出でては罪科脱れ難し／善之進同道一旦西ノ宮まで行き、更に後悔して大阪へ引還す時、見咎められてはならず、
 と、帯して居る刀を海中へ投込む等、武士にあるまじき卑怯の振舞があつたので、（傍点論者）

鷗外は、単に「投げ込んだ」と記すだけで、その理由の解釈や批判をさけて通る。かかる点に、彼の歴史小説創作の方法が瞥見できるのである。これを布衍すると、史伝「伊沢蘭軒」その三百六十九にいう、「事実を伝ふことを専にし、努て叙事の想像に涉ることを避けた。客観の上に立脚することを欲して、復主観を縦まますることを欲せなかつた」態度と酷似していると考えられる。何故かかる行為を人はなしたのかは、各自が抽出すべきであるとする彼の表現方法は、歴史小説と史伝において、基本的には変わっていないのである。

註(1) 小泉浩一郎「『大塩平八郎』論」、『言語と文芸』昭和四四年一月

(2) 幸田成友「大塩平八郎」東亜堂書房、明治四三年一月十日再版

三

第二章末に名が登場した大塩平八郎は、第三章においてその独裁的性格が点綴され、荻野四郎助の語った「肝癢持」という批判とともに、陰謀の性格を規定づけているようである。どのような者によって首謀されるかが、その計画を暗示する如く、作品は陰謀の結末を読者に予測させるのだ。そしてこれ以来、平八郎側の出来事と奉行側の動き

が交互にたどられながら、作品は展開してゆく様相を呈するのである。第四章では、大塩側における鷗外好みの人物が登場する。その宇津木矩之允は語る。

若し諫める機会があつたら、諫めて陰謀を思ひ止まらせよう。それが出来なかつたら、師となり弟子となつたのが命だ、甘んじて死なうと決心した。

自己の置かれた場所から脱け出さない、最期まで自分の持ち場を放棄しない人間像は、奉行側の坂本鉞之助とともに、作品を彩っている。例えば

併し頭遠藤殿の申付であつて見れば、縦ひ生駒山を越してでも出張せんではなりませんまい。

と、彼は語るのである。興津弥五右衛門、阿部一族、九郎右衛門などと共通する、自己の運命をそのまま受容してゆかんとする人間の像であり、鷗外自身の願望と祈念を含めた存在でもあろう。ただここで「坂本鉞之助」という一章を設けたのは、彼を鮮かに描出することにより例の官僚批判をさせるだけではない。作品は語っていないが付録に記されている次の個所に注意すべきであろう。大塩平八郎年譜、文政四年辛巳の条。

平八郎二十九歳。平山助次郎十六歳にして入門す。四月坂本鉞之助始て平八郎を訪ふ。／

幸田本には、「先輩交友」の個所に次の如くある。⁽¹⁾

坂本鉞之助、大塩乱の時には同心支配を勤めてゐた、同僚柴田勘兵衛が平八郎の槍術の師匠である所から交際を始めたので、同僚大井伝次兵衛を説き、其悻正一郎を洗心洞塾に入塾せしめたのは鉞之介である／

彼は平八郎と全くかわりのない存在ではなく、知己の間柄であることを思う時、「阿部一族」における柄本又七郎のドラマを推測することも可能なのだ。また、彼が入塾させた大井正一郎が宇津木を斬った当人であることは人の運命といったようなものに、不思議な感情を抱くのである。しかし、第五章に至って鷗外の筆は急旋回し、平八郎の内

面世界の描写が始まる。それが今までの、人間の行動により作品が展開してきたことに対してある異和感を与え、その点が「大塩平八郎」批判の論拠となっているのである。たとえば、丸山静氏は次の如くいわれる。⁽²⁾

思想家「哲学者」であった大塩が、それにもかかわらず、よかれあしかれ一揆の首領「米屋こはしの雄」でありえた所以を鷗外はその「外生活」に行動において捉えることができなかった。そしてそれを捉えることができなかった瞬間から大塩にかんしては、ながながとして「内生活」の叙述がはじめられる。

確かに、第五章に記される、「己が陰謀を推して進めたのではなくて、陰謀が己を拉して走つたのだといつてもよい。一体此終局はどうなり行くだらう。平八郎はかう思ひ続けた。」や、第七章の、「心の内には自分が兼て排斥した枯寂の空を感じてゐた。」という、あの有名な一節は、作品の叙述方法からして、異様な感じを与えなくてはならないのである。かつ、それらがまた、作品の主題に密接なかかわりがあると考えられるがゆえに、形象性全体としての批判も生ずることになったのであろう。ここで、作品主題を担っている主人公、大塩平八郎の造型について考察しなければならぬ。

註(1) 幸田成友、前出書。

(2) 丸山静「大塩平八郎」『文学』昭和二七年四月。

四

瀬田が駆けこんで来、陰謀がいよいよ実行に移される段になったまさにその時、物音を聞きながら、平八郎は「其儘端座して」次の如く考える。

そして熟した心の内を、此陰謀がいかに萌芽し、いかに生長し、いかなる曲折を経て今に至つたと云ふことが夢のやうに往来する。

鷗外が「夢のやうに」と書いたのは、こゝだけではない。第七章「船場」において、戦いをしてゐる最中、「平八郎は夢を揺り覚されたやうに床几を起つ」た、とある。過去が夢の如く人間に写るのは、それだけ必死に生きてきた証左である場合もある。しかし、平八郎は行動を起こし戦闘の際も、常に夢の中の出来事の如く感じ続けていることは、注意すべきところだ。

時々晝斎の入口まで来て、今宇津木を討ち果したとか、今奥庭に積み上げた家財に火を掛けたとか、知らせるものがあるが、其度毎に平八郎は只、一目そつちを見る丈である。(傍点論者)

外界の出来事がすべて自分とかかわりのないものとしてしか、平八郎には感じとめられてはいない。柄谷行人氏は、次のように指摘される。⁽¹⁾

現実的に事態が進行しているように見えながら、そこに何ら障害がないのだから、平八郎自身にとってはそれはただ観念の自己増殖のようなものにすぎない。／

そして、「平八郎は行動のさなかで夢をみており、この夢から『醒覚』できないのである」と続けられる。平八郎の造型に關してのすぐれた指摘であるが、夢とは本来、その中の出来事が自分の意志と無關係に進行し、その結果に對して意外だという感情のわかぬやうなものであろう。⁽²⁾そして、それが夢である以上、現実には何一つ生産的なるものを生み出さないことも明らかだ。かかることは、作者が後に彼をして「枯寂の空」を味わわせていることと無縁ではないのである。夢の中の自己は、自分の意志とかかわりなく動く。あたかも何物かにあやつられるがごとく。この、何かに動かされているかのように感じつつづけている大塩の心情は、鷗外の読者にとってなじみのないものではあ

るまい。例えばただちに作品「妄想」が想起できよう。柄谷氏は両者を比較して、論究されている。⁽⁸⁾

生れてから今日まで自分は何をしてゐるか。始終何物かに策うたれ駆られてゐるやうに学問といふことに齟齬してゐる。／併し自分のしてゐる事は、役者が舞台へ出て或る役を勤めてゐるに過ぎないやうに感ぜられる。／

自分の背後にあり、自己を動かしているものの実体を得んとして、主人公の翁は焦燥するのであるが、平八郎は畏怖と不安を抱くようだ。それと気づかれる如く、人間を動かしているような何物か、そして、人間とそれとのかかわりに、鷗外は生涯凝視しつづけたといえよう。その何物かを、彼は果して「運命」というように意識していたかどうか。しかしそれは、処女作「舞姫」にかすかに顔を見せ、「青年」「雁」⁽⁴⁾「妄想」などの現代小説を経、歴史小説に至って、確とした形をあらわすのである。例えば「阿部一族」。作品は権力と個我との対立に、その主題を求められてきたようであるが、より一層深いテーマが隠されていることは注意されるべきであろう。弥一右衛門、権兵衛なきあとの阿部一族は、勝つことを目ざしては戦わない戦いを、何故あえて行ったのか。一見君主と家臣の対立のみが、悲劇の誘因となつたようであるがそれはみせかけである。自然の掟としての「殉死」の存在、弥一右衛門をはじめとする登場人物達の性格や行為、あるいは、忠利の死という偶発的出来事、それら一切を含んだ何物か（運命）が、彼らの悲劇を形成したのである。弥一右衛門が切腹の折、次の如く言い放った。

己の子に生れたのは運じや。せう事がない。

「運」を「運命」と言いかえることも可能であろう。鷗外は、彼らをその中に投げ入れた。が、死に急ぐ彼らは、行為の死によつて、それに流されるままになることを拒絶する。彼らの死は、自己をかくあらしめた「運命」と立ち会い、さしちがえ、人間の「意地」を貫くことを意味していたのだ。その「意地」という、人間の不可測な情熱の讃歌が、作品の主題とも考えられるのであるが、運命と人間のかかわりは、後の史伝、「進むべくして進み、辞すべくし

て辞する、その事に処するに、綽々として余裕があつた。」涇江抽斎にまで底流して、鷗外の作家的モチーフを認識できるのである。

少し迂路をとつたようであるが、「大塩平八郎」の作品的主題もかかることと無縁ではないのである。自分の意志と外界との間に、ある決定的な距離を感じ、現実感を喪失している平八郎は、自分の過去を思い起す。かつての彼は、幻に見たことがそのまま事実となり、そこに至るまで一度も疑いが萌さなかつた。予感した「幻」が、彼の前に現われたのである。「己の意図が先ず恣に動いて、外界の事柄がそれに附随して来た。」ように、行為が彼の意志の下にあつたといつてよい。ところが今度のことは以前と異なることを、彼は何という理由もなく感じている。「今度はどうもあの時と違ふ。」というように。故に彼は漠然とした不安と予感を持つ。「動もすれば其準備を永く準備の儘で置きたいやうな気がし」ているのは、そのためである。つまりは陰謀の結末を、はつきりとはしないが、彼は感じ取つていたのである。「運命の予感」とでもいうべきか。常に見るところの成功時の幻も消え去り、「けふまでに事柄の捗つて来たのは、事柄其物が自然に捗つて来たのだと云つても好い。」と彼は考える。柄谷氏の指摘される、観念の自己増殖のようなものである。そしてこの、夢を見続けるかの如く行動する傍觀者的な平八郎の像は、終始変わることはない。が、彼の不安と予感が徐々に「形」となつて現われてくる時、彼は次第に夢からさめ、己れ自身を取り戻してゆくといつてよいだろう。つまり、彼の現実回復なのであるが、その時期は未だ来ない。陰謀の決行中にも、やつてしまったこと、やつていふことに「疑」を持ち、その意味を自問しつづけるのだ。敷衍していえば、自己存在の意味を問いかけているといつてもよい。何故なら、人は自分以外の何物か、例えば他者やあるいは自己のなしたこととかかわつてのみ、存在の意味を把握できうるものだからである。謀略の中、雜人達に金銀を取られてしまつた予想外の出来事も、他の者には「失望の色」が見えるにもかかわらず、彼一人は別段驚くことはない。未だ、夢の

中の事柄としてしか、とらえられないでいるのだ。ゆえに、「枯寂の空」を感じ、無に帰することを予感した平八郎が挫折した時、後に残されているのは、失われていた現実感を手に入れること以外にはないのである。同志の前で、彼は次の如く語る。

主謀たる自分は天をも怨まず、人をも尤めない。只気の毒に堪へぬのは、親戚故旧友人徒弟たるお前方である。自分はお前方に罪を謝する。／

この潔い平八郎像は、稲垣達郎氏のいわれる如く、単に「否定的意味深さにおいて」⁽⁵⁾のみ、鷗外の頭を占領し、造型されたのではあるまい。大逆事件は、作品形象の重要なモメントであり、それについては尾形竹次氏の詳細な御論考も存在する。彼の作品は、「いずれも時流への関心と現代に生きるかれ自身の生の課題への問いかけを秘めていた」⁽⁶⁾ことは事実であろう。が、作品の秘密は常に作家のモメントを超えた存在としてあると考えられるのである。「学者としての志をも遂げた」平八郎が、何故かかる行為をなしたのか、その不可思議な存在として鷗外の前にいた。彼もまた、運命という暗い力とともにいたのではないか、そう鷗外は作品を通じて問いかけているのではあるまいか。

註(1) 柄谷行人「意味という病―歴史と自然―」河出書房新社、昭和五十年二月。

(2) この点について、西川順一氏に示唆を受ける。

(3) 柄谷氏は、作品「妄想」と比較して「平八郎が『醒覚』でできなかったのは、自分が自分のように感じられぬ遊離感のためだといつてよい」と述べられている。ただここでは、「妄想」だけでなく、鷗外の作家的主題なるものと関連づけて考えたいのである。

(4) 「雁」における「運命」については、拙稿「鷗外『雁』の世界」を御参照下さい。『日本文芸研究』第二十六卷第一号、昭和四十九年六月。

(5) 稲垣達郎「『大塩平八郎』雑記」『解釈と鑑賞』昭和三十四年八月。

(6) 尾形仂「鷗外『大塩平八郎』における歴史と文学」『文学』昭和五十年二月。

五

平八郎の陰謀事件は失敗に終わった。彼の「夢」は、去ったのであろうか。格之助、瀬田、渡辺との四人になった時、彼は語る。

己は今暫く世の成行を見てるようと思ふ。尤も間断なく死ぬる覚悟をしてゐて、恥辱を受けるやうな事はせぬ。

無論、彼は謀略遂行のために「成行を見」るのではあるまい。あるいは、死を恐れてさけるわけでもない。単に見ることだけを、試みんとするのだ。では何故に、空しい試みをなそうとするのか。柄谷行人氏は、この不思議な彼の行為に対して、次の如くいわれる。⁽¹⁾

おそらく平八郎がぐずぐずと生きのびているのは、自分のやったことの意味あるいは自分の存在の意味をつかまないでは死にきれぬと思つたからではないだろうか。

作品の主題によりそうようにして述べられたすぐれた指摘であるが、「意味」を彼が自問しているのは、計画が失敗したからではない。陰謀遂行中にも問いつづけているのであり、いわば実践家であるべきところを、認識者あるいは傍観者でありつづけるのだ。

何事を仕遂げようとするのでもなく、単に生き見守りつづけること、彼の行為は自分の意志の元にはなく、またもや何かに動かされているように見える。ゆえに作品においては、時々の気分次第により、行為が決定されてゆくように、読者には写るのだ。発熱した瀬田を百姓家の方に見送った平八郎は、「急に身を起して」焚火を消し、信貴越の

方角へ向かうのである。彼は、瀬田が捕えられるであろうことを予感したのであるが、人間各人の運命は、自身で受容し全うしなければならぬ以上、彼を如何とも仕難いのである。平八郎は自身の行先とともに、瀬田のそれをも予感しているようだ。平八郎から離れた同志達が多く捕われたり死亡したりしているように、瀬田も後に溢死する。そこに至るまでの話は、作品内で一つの独立した挿話を形成している。

瀬田は夢を見てゐる。／足音は急調に鼓を打つ様に聞える。ふと気が附いて見ると、足音と思つたのは、自分の脈の響くのであった。／

高熱にうなされた彼が、次第に追いつめられてゆくさまを鷗外は簡潔に表現する。そして、「瀬田は二十五歳で、脇差を盗まれたために、見苦しい最期を遂げた。」と記す。彼に対する同情を、その文脈に感じられるのである。かかる瀬田の話の如く、エピソードの積み重ねでもって作品を形象してゆくのは、鷗外歴史小説の創作方法である。つまり「歴史其儘と歴史離れ」にいう、「事実を自由に取捨して、纏まりを付ける」ことを拒絶する方法なのだ。それゆえに、鷗外歴史小説の作品的主題を、簡単に抽出することが困難なのである。渡辺は自決し、瀬田も去った。かくて、残されたのは大塩父子である。

「急に」身を起こして焚火を消した彼らは、寺に入り僧形になって出てくる。頭を剃れという平八郎の命令に、格之介は「驚きもせず」従う。寺を離れた平八郎は、再び「突然」、大阪へ戻ることを彼に告げるのである。鷗外は、きわめて意識的に、「急に」「突然」という言葉をさしはさんでいる。瀬田の後影を見送っていた時、あるいは寺において殆んど一言も発しなかった時、平八郎の内部に、ある決断がなされたことを読者は了解する。しかもその決断は、自己の意志によってなされたはずにもかかわらず、何物かがそう仕向けたゆえに、「急に」「突然」と表現せざるを得ないものとして、鷗外はとらえている。人間のある危機的な瞬間には、意識された意志によっては領略が不可

能であることを、作品は告げるのである。

寺を離れると、平八郎が突然云つた。「さあこれから大阪に帰るのだ。」

格之助も此詞には驚いた。「でも帰りましたら。」

「好いから黙つて附いて来い。」

平八郎は、大阪へ戻ることが自殺行為だということを知っている。格之介ですら父の言葉に驚き、先に立って行く姿に「驚異の情」を次第に加えるのである。では平八郎は、何故に大阪へ戻るのがか。明らかになごとく、今まで夢を見続けていたような彼にある転換が起こり、ようやく自己を取りもどすべく、行動し始めるのである。失われていた現実の奪還であり、ある「形」に帰することの希求でもある。大阪へ戻るとは、その具体的なあらわれなのだ。「その大阪へ帰ろうとする念は、一種の不可抗力のやうに平八郎の上に加はつてゐるらしい。」と、作品は語る。大阪に戻ると、自分のやったことの意味がわかるかも知れぬ、かかる自己を形成せしめたその当の実体が把握出来るかも知れぬ、彼はこう考えているのであろう。だから如何に空しくとも、彼はやらねばならない。戻らねばならないのである。

しかし、大阪の美吉屋で待ちかまえていたのは、水がすき間からしみ入るようにして、陣屋に伝えられたことだけである。平八郎らは、見つからないと思つたわけではなく、すべて予見通りのことであらう。そして当然の自決を迎えるわけであるが、果たして自己存在の意味を、あるいは、自己を形成した何物かの実体を感じることが出来るか、作品は黙して語らないようである。なぜなら、それは作者自身の課題となりつづけるものだからだ。

註(1) 柄谷行人、前出書。

六

作品「大塩平八郎」は、従来きわめて批判の多い歴史小説であった。石川淳氏をはじめとして、鷗外論者の多くはこの作を失敗作と認めているようである。しかし、平八郎の造型は、きわめて多くの問題を投げかけている。鷗外は何故彼に「そぐわない」⁽¹⁾主人公を創作したのか、平八郎は如何なる人物であるのか、依然として謎は多いのである。小泉浩一郎氏は、その詳細な論考の中で、次のようにいわれている。⁽²⁾

「大塩平八郎」は現実の国家秩序とそれに対する冷徹な認識の欠落した、「功利の末技」を知らぬ観念的思想家に率られた一揆的反乱との対立を描いた作品なのである。

氏の指摘は、作品のモチーフを、「權威」と「個我」との対立の主題の発展線上に求められようとされる主張と、基を一にしている。私はここで、モチーフを運命と人間のかかわりに見、作品の世界を考察したのである。鷗外の筆は、「大塩平八郎」において、かかる「運命」への問いかけを試みながら、次の作品「堺事件」「安井夫人」「山椒大夫」と、運命を従容と受容してゆく人間の像を形成してゆくのである。

註(1) 小田切秀雄「近代日本の作家たち―『大塩平八郎』と大逆事件―」法大出版局、昭和四十八年五月。

(2) 小泉浩一郎「『大塩平八郎』再論」『日本近代文学』第13集、昭和四十五年十月。